

郷土の古文書

その38 伊勢参宮道中日記(二)

編集・発行：五日市郷土館

あきる野市五日市920-1

発行：令和6年5月8日

八日 四ツ時御宮参ニ出ル 一字田のちや屋へさげ重まいり休^(あきま)茶屋にて夕飯出ル^(あきま)下宮様方^(あきま)あまの岩とへ廻り 内宮様方^(あきま)朝熊へ廻り 天気よく遊山也^(あきま)朝熊茶屋^(あきま)日暮道迄ちうちん^(あきま)五はり^(あきま)迎^(あきま)遣候^(あきま)尤案内^(あきま)半助様と申仁^(あきま)井^(あきま)弥吉様同道^(あきま)相廻ル^(あきま)朝熊迄太夫様御名代老人^(あきま)万右衛門様酒迎^(あきま)として御出被成候事^(あきま)

九日 雨天 四ツ時過^(あきま)御神楽初り^(あきま)八ツ過^(あきま)御仕廻^(あきま)それ方御馳走出ル^(あきま)七五三の御料理也^(あきま)

十日 九ツ時御師様方出ル^(あきま)宮川迄さ^(あきま)け重御出^(あきま)新右衛門様^(あきま)万右衛門様^(あきま)其外七八人宮川迄御送り^(あきま)舟^(あきま)御馳走いたし^(あきま)尤茶屋^(あきま)同行とわかれ^(あきま)それ方田丸^(あきま)有^(あきま)七ツ半過^(あきま)着^(あきま)木銭十六銭^(あきま)而宿かり候事^(あきま)

十一日 大か七明六ツ時出ル^(あきま)天気よしのじりと言^(あきま)所^(あきま)瀧原大神宮あり^(あきま)此境内大木あり^(あきま)色々の名木有^(あきま)まゆミと言^(あきま)所^(あきま)泊り九里の道也^(あきま)

十二日 まゆミ雨天ゆへ六ツ半過^(あきま)出ル^(あきま)天気直り^(あきま)おしまで七ツ半過^(あきま)着泊り^(あきま)道法八里^(あきま)候得^(あきま)共山坂^(あきま)而大分難儀^(あきま)持^(あきま)五ツ越ス^(あきま)

解説文

八日

四ツ時御宮参ニ出ル 一字田のちや屋へさげ重まいり休^(あきま)茶屋にて夕飯出ル^(あきま)下宮様方^(あきま)あまの岩とへ廻り 内宮様方^(あきま)朝熊へ廻り 天気よく遊山也^(あきま)朝熊茶屋^(あきま)日暮道迄ちうちん^(あきま)五はり^(あきま)迎^(あきま)遣候^(あきま)尤案内^(あきま)半助様と申仁^(あきま)井^(あきま)弥吉様同道^(あきま)相廻ル^(あきま)朝熊迄太夫様御名代老人^(あきま)万右衛門様酒迎^(あきま)として御出被成候事^(あきま)

九日

雨天 四ツ時過^(あきま)御神楽初り^(あきま)八ツ過^(あきま)御仕廻^(あきま)それ方御馳走出ル^(あきま)七五三の御料理也^(あきま)

十日

九ツ時御師様方出ル^(あきま)宮川迄さ^(あきま)け重御出^(あきま)新右衛門様^(あきま)万右衛門様^(あきま)其外七八人宮川迄御送り^(あきま)舟^(あきま)御馳走いたし^(あきま)尤茶屋^(あきま)同行とわかれ^(あきま)それ方田丸^(あきま)有^(あきま)七ツ半過^(あきま)着^(あきま)木銭十六銭^(あきま)而宿かり候事^(あきま)

十一日

大か七明六ツ時出ル^(あきま)天気よしのじりと言^(あきま)所^(あきま)瀧原大神宮あり^(あきま)此境内大木あり^(あきま)色々の名木有^(あきま)まゆミと言^(あきま)所^(あきま)泊り九里の道也^(あきま)

十二日

まゆミ雨天ゆへ六ツ半過^(あきま)出ル^(あきま)天気直り^(あきま)おしまで七ツ半過^(あきま)着泊り^(あきま)道法八里^(あきま)候得^(あきま)共山坂^(あきま)而大分難儀^(あきま)持^(あきま)五ツ越ス^(あきま)

十三日 おし明六ツ時出ル^(あきま)大峠五ツ越ス^(あきま)大なんじゆ^(あきま)馬なし^(あきま)籠なし^(あきま)不達者ものハ難成道也^(あきま)木の本へ暮時着^(あきま)道法九里^(あきま)然^(あきま)共ミきと言^(あきま)所^(あきま)方そねと言^(あきま)所迄^(あきま)舟^(あきま)のり壺里^(あきま)舟ちん式百廿四文出ス^(あきま)

十四日 木の本明六ツ時出ル^(あきま)新宮迄山なし^(あきま)然^(あきま)共砂^(あきま)道あしく熊野新宮へ九ツ時参詣いたし^(あきま)それ方うぐい^(あきま)泊り^(あきま)足^(あきま)シいたミ候もの有ゆ^(あきま)七ツ時前^(あきま)泊り^(あきま)

十五日 明六ツ時うぐい出ル^(あきま)大分難所ゆ^(あきま)道はかどり不申候^(あきま)四ツ時一ばん札納^(あきま)七ツ時前^(あきま)こぐち言^(あきま)所^(あきま)泊り^(あきま)山道^(あきま)少々雨ふり

十六日 こぐち明六ツ前^(あきま)出ル^(あきま)本宮様へ四ツ前着^(あきま)それ方ちかつと言^(あきま)所^(あきま)泊り^(あきま)暮時宿山道なん所^(あきま)大分なんぎ^(あきま)道法九里余

十七日 ちかつ明六ツ過出ル^(あきま)山道なん所あり^(あきま)みなべと言^(あきま)所^(あきま)泊り^(あきま)道法九里半

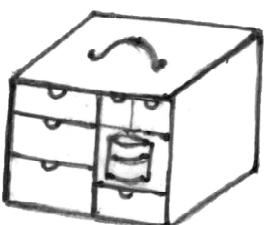
十八日 みなべ七ツ時出ル^(あきま)雨天朝方合羽着^(あきま)いせきと言^(あきま)所^(あきま)泊り^(あきま)道法十里^(あきま)宿悪敷なんきいたし候

十九日 いせき明七ツ半時出ル^(あきま)きみ井寺へ九ツ時着^(あきま)それ方若山城下一見^(あきま)権見様其外名所^(あきま)一見^(あきま)岩手と言^(あきま)所^(あきま)暮六ツ半過着^(あきま)道法拾式里

廿日 岩手明六ツ過^(あきま)出ル^(あきま)こかわへ四ツ時前^(あきま)着^(あきま)くわんおん堂焼失^(あきま)付奉加帳出ル^(あきま)依^(あきま)之^(あきま)老冊請取^(あきま)それ方荷坂^(あきま)七ツ過着^(あきま)大乗院茶^(あきま)酒迎有^(あきま)それ方案内のもの^(あきま)のそ^(あきま)る^(あきま)大乗院へ暮時着^(あきま)

廿一日 朝志のほうじ有^(あきま)それ方法印様^(あきま)御尊意同性方へも御伝言有^(あきま)それ方四ツ時太子様参詣いたし^(あきま)罷帰^(あきま)り中食後七ツ時前^(あきま)罷立候^(あきま)坊入式分出ス^(あきま)山案内之^(あきま)僧^(あきま)百文出ス^(あきま)泊り^(あきま)かミ^(あきま)と言^(あきま)所^(あきま)山^(あきま)五十丁め也^(あきま)

廿二日 かミ^(あきま)明六ツ時出ル^(あきま)まきのおくわんおんさまへ九ツ過着^(あきま)山道殊外なん所^(あきま)茶^(あきま)や^(あきま)も在家^(あきま)もまきおの内^(あきま)無^(あきま)之^(あきま)難儀いたし^(あきま)徳朱院と言^(あきま)寺^(あきま)申^(あきま)合^(あきま)山^(あきま)頼^(あきま)こ^(あきま)給^(あきま)川^(あきま)中^(あきま)言^(あきま)所^(あきま)泊り^(あきま)七ツ時過着^(あきま)



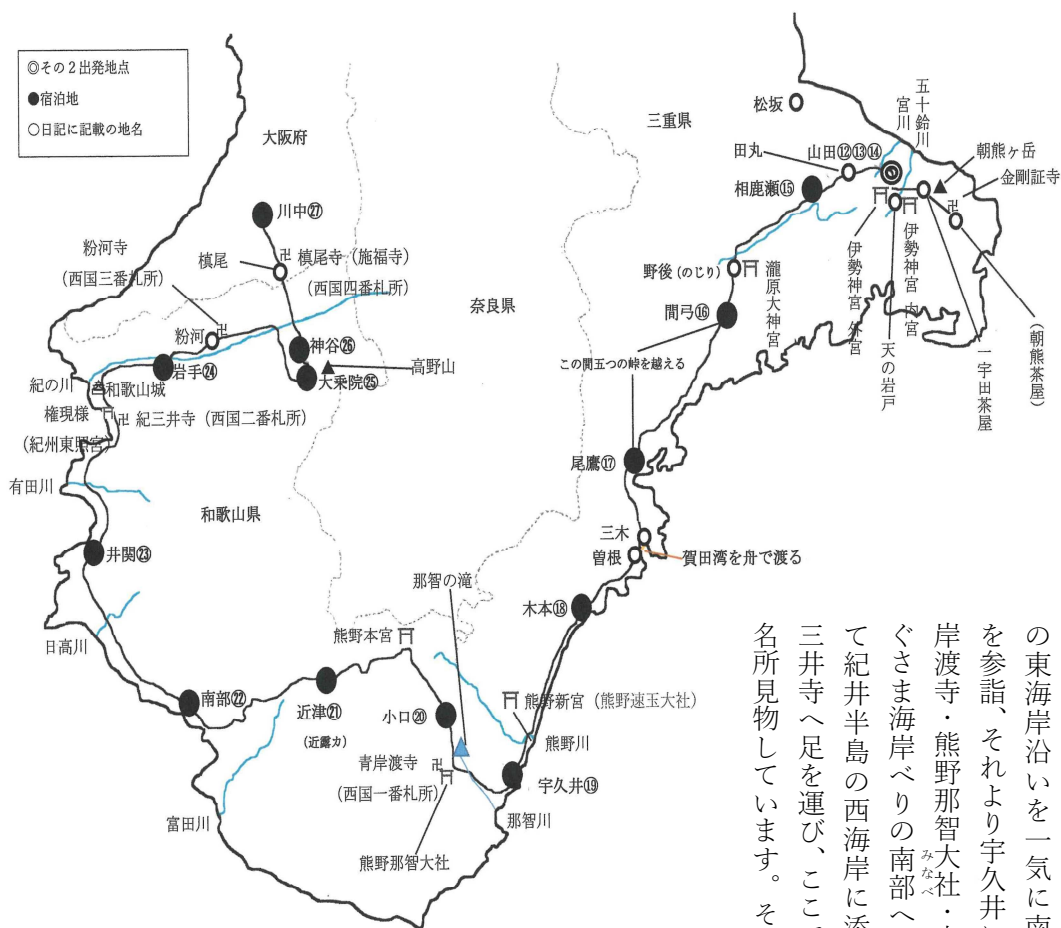
提重

解説

前日6日に泊った松坂で皆髪をさかやきにして参宮のための身支度を整えた一行は、はじめて全員で伊勢山田迄籠に乗り御師宅へ着き、8日朝いよいよ目的の伊勢神宮を参拝することになりました。外宮・天の岩戸・内宮と進み一宇田の茶屋で昼食、それより朝熊ヶ岳へ登り、二人の案内人の先導

でいろいろ見物「天気よく遊山也」と書かれています。ことからも、やっと旅行気分を味わった感じがうかがえます。御師宅の食事や接待は上等でしたが、この「覚日記」の後述をみますとお神楽・礼金等諸入用金として御師へ74両という大金を預けていた事にも驚かされます。

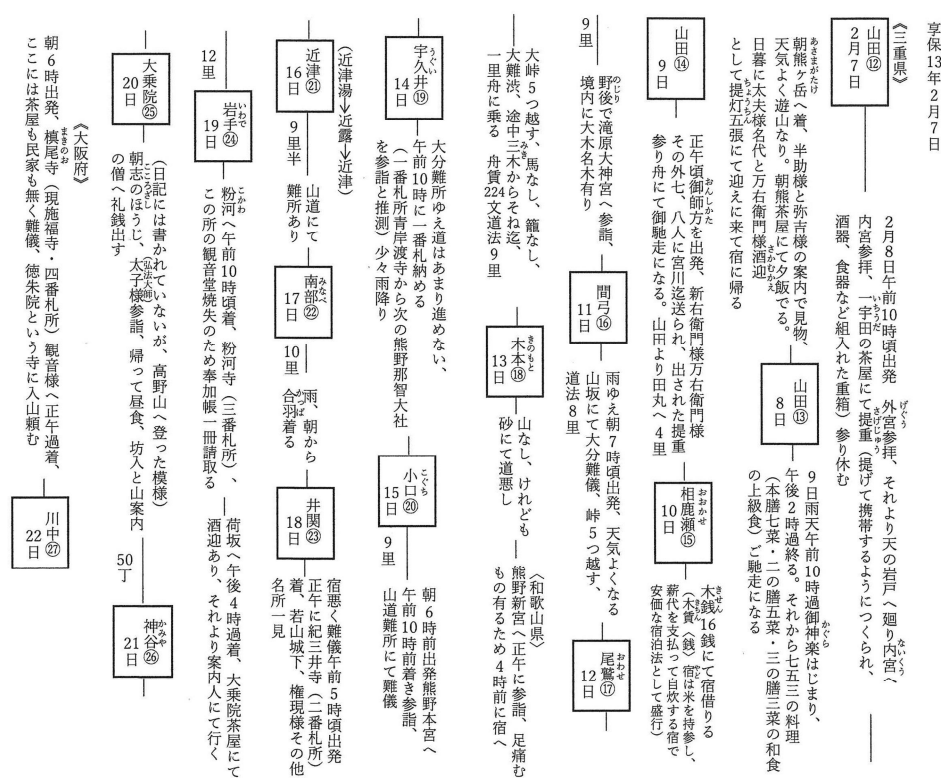
3日間伊勢で過ごした一行は、紀伊半島の東海岸沿いを一気に南下して熊野新宮を参詣、それより宇久井に泊り一番札所青岸渡寺・熊野那智大社・本宮へ参詣し、すぐさま海岸べりの南部へ下りました。そして紀伊半島の西海岸に添って二番札所紀三井寺へ足を運び、ここでは和歌山城下で名所見物しています。そして紀ノ川に沿っ



伊勢参宮道中日記（二）の道中行程図
[三重県伊勢市山田から大阪府川中まで]

て上流へむかい、岩出から三番札所粉河寺の観音堂へ行ったところ焼失していたため奉加帳を受け取っています。次に推測すると高野山へ登り大乗院でとまり、下山途中神谷へ一泊し、大阪堺へむかう途中四番札所槇尾寺へ参詣し、宿がなく難儀してやっと川中という所で宿につくことができました。

伊勢参宮を兼ねて西国観音霊場を順番に参詣するのは、一生に一度と思う当時の人達からすると当然のことと思えます。また食事の内容はほとんど書かれていないのですが、それぞれ自分で頼んで食べたと思われる、宿も予約などなしにあいている宿に分散して泊ったよう、大変苦労している様子が簡単な文章からも察せられます。



伊勢参宮道中日記（二）の道中図解 ※□は泊った所
[三重県伊勢市山田から大阪府川中まで]